

真の幸福を得るには ～「心の法則開運法」と「真理宣言法」の欠陥について～

2012年4月

「世界平和の祈り」は最高の自己啓発法

「世界平和の祈り」から完全円満な人格が現れる！

私の解説によって五井先生の真実の教えがより多くの方々に理解され、「世界平和の祈り」の素晴らしさが再認識されたら、こんなに嬉しいことはありません。「世界平和の祈り」は世界平和実現への最短距離の道であり、個人の神性開発にとっても最善の方法であるのです。「世界平和の祈り」以外の方法は、表現が古くて今や現代感覚に合わなかったり、自他を責めたり、理想に把われて現実から逃避したり、自己を實力以上に高く見せようと無理をしたり、正直に生きられなくなるなど、思いがけない欠陥が潜んでいるものです。それに対して、「世界平和の祈り」には欠陥が一つもないのです。短所と言えば、自力行の人には向かないことと、あまりにも易し過ぎて軽く見られてしまうことくらいです。

「世界平和の祈り」を祈っておりますと、一つも欠陥がないのですから、祈っている人が円満な人柄になってゆくのですね。どこの宗教団体に行きましても、その宗教団体独特の雰囲気があるものですが、それはその宗教団体で行なっている祈り言によってその雰囲気が出てくるのでありまして、祈り言によってその人の人柄が変化してくるのです。そして、「世界平和の祈り」のような大きな人類愛の祈り言を常に祈っている人からは、神々と同じ明るく温かい清らかな雰囲気が自然に現れてくるのです。宗教をやっている人にありがちな、どこか非常識であったり偽善的であったり、奇妙な言動に眉をひそめるということがありません。そうした実証を見定めた上で、『世界平和の祈り』は完全な祈り言である」と私はいつも申しているのです。「世界平和の祈り」は完全な祈り言であるのですから、「世界平和の祈り」を祈っている人が、短所が消えてゆき、完全円満な人格が現れてくるのは当然のことであるのです。

最高の自己啓発法は「世界平和の祈り」を祈ること

守護の神霊への全託こそが五井先生の根本のみ教えであり、守護の神霊に頼らずに肉体の自力のみで生きてはゆけませんし、守護の神霊の助けなくして神性を顕現することは不可能であることを知らなくてはなりません。それに対してアメリカを中心とする自己啓発書には、『私は出来る』と思えば出来るようになる」とか『私は完全である』とイメージすればその通りになる」というような教えがありまして、守護の神霊に頼るような教えを説いている本は少ないのです。ところが、その自己啓発書を書いている著者が自分の書いた通りに実行できているかと言いますと、殆ど実行できてはいないのです。それは、自己啓発書の殆どは、「このように思えば多分こうなるだろう」と自分の推理を書いている

にすぎないからです。しかしながら、その書き方が非常に自信を持って書いているために、読者はその自己啓発書に書いてあるようにその著者も実行できているに違いないと勘違いしてしまうのです。

アメリカの自己啓発が日本に進出してきてから暫く経ちましたが、ポール・J・マイヤーの有名な SMI(サクセス・モチベーション・インスティテュート)にしても、ナポレオン・ヒル財団のセミナーにしても、現在は既に行き詰まりが来ているようです。SMIではそのセールス組織を批判する本がありますし、また、ナポレオン・ヒルの日本支部でセミナーを受けた人たちのうち本当に成功した人は1%もいないと、その指導者は正直に告白しています。実際にはその1%もいないのが真実でしょう。

それでは、「あなたは成功できる」という本を読んだのに、そして、その本に書いたある通りに実行したのに、なぜ成功できないのか？ それは、守護の神霊の存在を教え、守護の神霊とコンタクトする方法を教えていないからなのです。本の一部にそれらしき霊的な知識は書いてあっても、実際に霊的な存在と交流する方法をもっと生き生きと書かなければ、読者は「人間は思った通りになる」という想念の法則の教えに興味を持ってしまいます。つまり、「心の法則」(想念の法則)と「守護の神霊への祈り」の教えを同じ本に書いたら、大抵の人は分かりやすい「心の法則」の方へ興味が傾いて行ってしまうのです。

守護の神霊に日々感謝し、「世界平和の祈り」を祈り続けてゆきますと、自己啓発の教えを実行しているよりも遙かに安心した心境になり、日常生活の仕事においても自然に成功してゆくことができるのです。日本で初めて Self-help を「自己啓発」という言葉に翻訳した桑名一夫先生に直接学んだ私が自己啓発を実行している多くの人たちの行為を見てきて、「祈りは自己啓発より優れている」と実感しているのです。最高の自己啓発は「世界平和の祈り」を祈ることであるのです。祈りの力によって人間は最高の能力を発揮するようになるのですし、世界は平和となってゆくのです。「私は出来る、私は出来る」と念じるよりも「世界人類が平和でありますように」と祈る方が、人間の潜在能力を大きく開発してゆくことができるのです。それは「神は愛なり」であるからです。

世界平和の祈りによる真理実現法

五井先生の偉大なところは、「如何にしたら真理を一般民衆でも容易に実行できるようになるか？」と思案され、「世界平和の祈りによる真理実現法」を発見されたことであるのです。

五井先生が教えたかったことは、真理の言葉は誰にでも言える、悟っていない人でも言えるということです。真理の言葉を話しているからといって、それだけでその人を信用したり尊敬してはならないのです。真理の言葉を何回繰り返して唱えても、宣言しても、ただそれだけでは行為に現せるようにはなりません。大事な問題は、「真理を如何にしたら行為に現すことができるのか？」ということなのです。真理の言葉を話したり書いたりして

いる宗教書は、書店に行けば数え切れないほど置いてあります。しかし、真理の言葉を実際行為に現す方法を教えてくれる宗教書は殆どありません。それに、「これは真理であるから実行しなさい」と教える宗教者自身が実際行為にはその真理を実行していないことが多いのですから、一般民衆がその教えを容易に実行できるはずがありません。ですから、一般民衆に対して真理の言葉をただ話すだけで自己満足しているようでは、現代の宗教者としては失格なのです。

真理の言葉は誰でも知っています。真理の言葉は心境に関係なく誰にでも言えます。真理の言葉は誰にでも宣言できます。そんな真理の言葉や理屈はもうたくさんです。真理の言葉の羅列などもう要らないのです。いくら真理の言葉を聞かされたところで、真理を実行することはできません。一般民衆にとって、真理の言葉などもう聴きたくもないのです。真理の言葉を口に出して唱えてみたところで、少し自分が偉くなったような気分がして虚栄心が満足するだけで、その後には空々しい虚しさだけが残ります。実際に実行できない真理の言葉を唱えれば唱えるほど、現実の自分の心境や実際とあまりにも隔たりがあるのを知って良心に苛まれ、心苦しくなってくるのです。真理の言葉を人々に話しながら、自分の行為には真理を現せないことを知りたくはない。これでは良心の声に耳を塞ぐ偽善者になるばかりです。

「真理の言葉即真理の行為」とはならないのです。「他力行即真理実現」となるのです。そこで五井先生は、「真理の言葉を宣言しなさい」とは教えずに、「真理の言葉をそのまま行為に現そうとする必要はありません。守護の神霊に対して『世界平和の祈り』を祈りなさい。『世界平和の祈り』をひたすら祈っていさえすれば、救世の大光明の加護力によって、力まずして自然に真理の行為が現れてくるんですよ」と説かれているのです。これは実行した人は必ず理解できます。今は「世界平和の祈り」の実行あるのみです。この「世界平和の祈り」こそ、全宗教者が心をついにできる唯一の祈り言であるのです。

参考：靈性開発と学問知識

学問知識を持っている人は、この世的な地位も高まり、世間から信用されますし、神のみ心を知性的に表現でき、宗教指導者として幅広い働きができますから、歴史に名を残す宗教者となるのですが、神様のみ心深く入り込めた人は、学問知識があろうとなかろうと、無名の妙好人であろうと、同等に素晴らしい人であるのです。学問知識の吸収と靈性開発修行の関係については、老子も《学を為（おさ）むるものは日に益（ま）し、道を為（おさ）むるものは日に損ず。これを損じてまた損じ、以て無為に至る。無為にして為さざるは無し》（老師道德経・第48章）と説いております。その老子の教えを五井先生はこのように解説しておられます。

《道を為（おさ）めていて、この世的な生活環境では損を重ねていくように見えようとも、無為の世界に達し得た時には、この世的な枝葉末節的な学問を、如何に多く為（おさ）めたと自負する人々がどのように沢山集まったよりも、それは比べるべきもない深い広い、偉大な行為のできる人になっているのだというのであります。

無為にして為さざるは無し、になるのです。無為の境地になれば、どのような智慧も、どのような力もでてくるのでありまして、その場その時、必要に応じた能力が、無為の世界、宇宙根源の世界から流れでてくるのです。根源世界から流れってくる智慧能力は、この世的な学問知識の比ではないのです。》

(五井昌久著『老子講義』第二十四講、p.232～233)

ところが、この無為の境地に達するまで道を極めることが大変なのでありまして、この世的な損失を受けて、靈性開発修行も途中で挫折してしまいがちなのであります。ですから、道に生きることは後回しにして、この世的に役立つ学問知識を得ることに力を注いでも無理からぬことであると思うのです。確かに今までの本心開発法はこの世的な学問知識と両立できず、学問知識を断ち切って道の修行に打ち込む必要があったのですが、現在は幸いなことに神から「世界平和の祈り」という効果的な靈性開発法が人類に授けられまして、この世的な学問知識に力を注ぎながらも急速な靈性開発が可能となってきたのです。「世界平和の祈り」によって心身の調和の取れた生活ができるようになったのです。日常生活そのまま「世界平和の祈り」を無理なく祈っているだけで本心開発が自然に捗るのでありますから、この世的な学問知識を得ることに力を注げる時代になったのです。「世界平和の祈り」は一日に一回でも祈れば充分なのですから、残りの時間は学問知識を学び、必要な資格や技能を身につけ、人々や社会のために働き、十分な財力も得て、靈性開発の向上と同時にこの世の生活を向上させればよろしいのです。時間的に余裕ができますから、スポーツや趣味を存分に楽しむこともできます。

但し、肝腎の「世界平和の祈り」の基本的な教えが理解できなくて、「世界平和の祈り」に疑問を抱き、途中で止めてしまったり、誤てる宗教へと外れていってしまうような心境では、このような自由な生活はできません。そのためにも、「世界平和の祈り」についての基本的な宗教的知識は最初にしっかりと学んでおく必要があるのです。そこで、五井先生のご本を読んだり、私の指導する統一会に出席して、五井先生のみ教えの基本をしっかりと学んでおく必要があります。「世界平和の祈り」を日々祈りつつ、この世の生活向上のためにも、「世界平和の祈り」を広めるためにも、この世の学問知識を身につけて下さい。特に外国語の習得は今後ますます必要となると思われます。

「心の法則開運法」と「真理宣言法」の欠陥を知れ！

「祈りの行」と「真理宣言行」

「世界平和の祈り」を祈る時は、「神様（守護の神霊）、お願いします。世界人類が平和でありますように…」という気持ちでお祈りしますと、神のみ心に最も深く入れるのです。その結果、真実の安心、真実の感謝の境地になり、時間の経過と共に現世利益も授けられ、自己の現世での運命が上昇し、現世の生活も向上してくるのです。この「世界平和

の祈り」一つの行に徹することが安心立命を得る最短距離の方法であるのです。

皆さんは「世界平和の祈り」によって安心立命への道に入ることができたのです。唯一会の会員は「世界平和の祈り」だけの唯一の行によって救われた先達であるのです。先達の皆さんの素晴らしい体験談は後輩の人々にとって非常に有意義なものとなり、大きな勇気を与えるものとなるでしょう。

神性開発の方法として、「祈りの行」の他に「真理宣言行」を併用して勧めている宗教者がいますが、五井先生はこの「真理宣言行」を「観念的な神の子観」と評していて、「祈りの行」一本槍に生きるように勧めています。「真理宣言行」とは私が名付けた名称で、生長の家では「実相観」と名付けております。「真理宣言行」とはどういうものかと申しますと、「人間は全て神の子で、不完全なものは無いのだ」「悪い人は無いのだ」「善い人ばかりなのだ」「あの人は善い人なのだ」「あのことは善かったのだ」と、観念的に自己の心に真理の言葉を言い聞かせようとする行法のことを言うのです。

五井先生は、生長の家の講師として「祈りの行」と「真理宣言行」の二つの行法を併用して行っていたのですが、「真理宣言行」では観念的な神の子観から抜け出すことができず、「祈りの行」のみが自然法爾的に人間神の子の実観を体得できることを発見したのです。「私は神の子である、あの人も神の子である、人類も神の子である」と強くイメージして真理の言葉を宣言したところで、所詮観念的な神の子観であり、「人間神の子」を実観できなかったのです。それに対して「祈りの行」に行法を統一してみたら、いつのまにか「人間は神の生命そのものである」という真理を実観として悟ったのでした。その体験から、五井先生は「真理宣言行」の行法を捨て去り、「世界平和の祈り」という「祈りの行」一つに単純化したのです。守護の神霊に対して世界平和を願う祈りをし続けてゆくうちに、真理の言葉を宣言しなくても、いつのまにか無理なく真理が開顕されることを五井先生は体験されたのです。そして、五井先生が体験された悟りは遅かれ早かれ誰でも体験できるのです。

五井先生に教えていただいたように、私も「世界平和の祈り」に統一したら安心立命を授けられました。私の指導を受けて「世界平和の祈り」に全託した同志は次々と安心立命を得ております。余計な行法をするから却って悟りへの道が遠くなるのです。皆さんも余計な行法を捨て去り、「世界平和の祈り」一つに全託しましょう。そうしていれば、観念的に自己の心に真理の言葉を言い聞かせなくとも、自然に人間神の子を実観できるようになります。「真理宣言行」を捨て、「祈りの行」に専念した時、真理は行為となって忽然として現れてくるのであります。

「心の法則開運法」と「真理宣言法」の欠陥

「思う通りになる」という「心の法則による開運法」には非常な欠陥があり、「我は神なり」と真理を宣言する「真理宣言法」にもまた非常な欠陥があるのです。この二つの方

法にはどちらも非常な欠陥があることを知りさえすれば、「世界平和の祈り」の素晴らしい完全性に目覚めてくるのです。ところが、惜しいことに、その欠陥を知らずに「自分は最高の真理を説いている」と自ら思い込み、「心の法則による開運法」や「真理宣言法」を自信を持って信者さんたちに説いている宗教者が多いのです。そして、その宗教者があまりにも自信に満ちていて堂々としているために、信者さんたちもその教えに潜んでいる欠陥に気づかぬままに従ってしまっているのです。

「思う通りになる人生」とか「語った通りになる人生」という「心の法則」は三界（肉体界・幽界・霊界の下層）で作用する想念の法則であり、三界においてその法則は確かに存在するのですが、霊界の中層以上の世界には業生の法則である「心の法則」は通用しないのです。その法則が三界に存在している事実を五井先生は否定しているのではありません。「心の法則を応用して神性を開発することはできないし、真実の安心立命を得ることはできない」と五井先生は説いているのです。そういう意味で、五井先生は「心の法則による運命改善法」を否定しているのです。

実相論と現象論、言い換えれば「人間神の子、完全円満、悪も不幸も病気も無い」という真理宣言法（神想観）と、「あなたの人生はあなたの思った通りになるのであるから、善を思えば善が現れ、悪を思えば悪が現れるのだ。だから、善のみを想い、悪を想わぬようにしなさい」という心の法則の開運法は、異なった原理に基づく思想でありまして、同時に行なおうとしますと二元論になり、その人の言動は矛盾したものになってしまうのです。矛盾した言動をしていては神性が現れるはずがありません。「心の法則を応用した開運法」は自力の意思力によって業想念の強い力に対抗してゆかねばならないのですから、神性を開発することは、頭で考えるほどそう生易しいことではないのです。これが簡単にできるならば人類世界は既に平和になっていることでしょう。自力の意思力ではどうにも運命を変えられぬので、人類は滅亡寸前まで追い込まれてしまったのです。肉体人間以上の強力な守護の神霊に運命修正をお願いしなければどうにもならない状況であるのです。

五井先生は、生長の家の教えである「心の法則による開運法」を捨て去り、やはり生長の家の「人間神の子、完全円満論」という現在完全円満論を、「人間は本来、神の子であり、完全円満である。現在は未完成の段階にあるので不完全であるが、現在の不完全な姿は時間の経過と共に消え去ってゆき、未来には神の子の完全円満な姿が現れてくるのだ」という未来完全円満論に修正されたのです。五井先生は、生長の家の複雑で矛盾した二元論の教えを未来完全円満論だけの一元論に教えを単純化したのです。

しかし、この「未来完全円満論」を理解していない人が意外に多いのです。「未来完全円満論」が一つあれば、「心の法則論」を用いる必要はもうなくなるのです。人間は未来において神の子になるのです。この未来実相論を本当に信じれば、「心の法則」を用いて「悪を思うまい」と念じたり、「神の子になろう」と念じたり、無理に「私は神の子であ

る」と偽善者ぶらなくてもすむのです。それを再び「心の法則」を持ち出すのは、「人間は神の子になる」という真理をその人自身が信じていないからに他なりません。

「善を思えば善が現れ、悪を思えば悪が現れる」というのが「心の法則論」ですが、この思想は性善説ではなく、性善悪混淆説であるのです。「人間は悪いことを想い、悪い行為もする、だから、善を思わなくてはならないのだ、善を行なわなくてはならないのだ」と言うのですから、「人間神の子、完全円満」と性善説を唱える実相論とは矛盾する原理であるのです。ある時は「完全な神の子人間」になったかと思えば、ある時は「過ちをする業生の人間」になったりするのは実におかしなことであるのですが、この矛盾した教えを矛盾と気づかない人の何と多いことでしょう。まずこの二元論の矛盾に気づくことが五井先生の教えを理解する第一歩であるのです。

二つの思想にはそれぞれどんな欠陥があるかと言いますと、「心の法則」を説けば、それはいつしか人を責め裁く道具と化します。また「人間神の子、完全円満」を説けば、嘘ばかりつく偽善者を生みます。そこで五井先生は「心の法則論」をきっぱり捨て去り、自他を責め裁く苦しみから私たちを解放して下さいましたのです。五井先生があれば「心の法則」を用いて人を責め裁いてはいけません。心の法則を持ち出せば、そのつもりがなくても、いつしか自分や人を責め裁くようになってしまいます。それを知っているから、私は心の法則をきっぱりと捨て去ったのだ」と幾度も説いたにも拘らず、それを今になって再び「心の法則論」を持ち出し、人を責め裁いているようでは、「親の心、子知らず」と言う他ありません。

五井先生は、従来あった旧光明思想の「人間は現在神の子であり、現在完全円満であり、現在悪も病気も不幸も無い」という現在完全論を、「人間は本来、神の子である。現在は完全な神の子を現す途中であるから不完全なのだ。しかし、その不完全な姿は何れは消えてゆき、未来は人間は完全な神の子の姿を現せるようになるのだ」という中庸に位置する新しい未来完全論に修正したのです。それなのに、「五井先生の光明思想は昔の低い心境だった信者の皆さんに合わせた古い光明思想である」と説き、生長の家の真似をして、『『我は神なり』という真理宣言形（現在完全論）こそより進んだ新しい光明思想である」と誤り解す宗教者が現れてきたのは残念なことです。五井先生の「業は消えてゆく姿で、人間は神の子になる」という中庸光明思想こそ新しい光明思想であるのにも拘らず、「五井先生の教えは古い光明思想である」と封印されてしまったのです。

完全な神の子の自分が守護の神霊に頼るのはおかしなことです。守護の神霊に頼っているのは自分が完全であるとは宣言できません。不完全な自分になってしまいます。そこで、「私は神である」と真理宣言をする人は自力的になり、守護の神霊に頼らなくなってくるのです。「私は神である」と観念的に言ったところで、真実は神の子になったわけではないのですから、自力で運命を改善しようとやってみても、なかなか改善することはできません。しかし、「私は神の子であり、完全円満である」と宣言してしまった手前、守護の神霊に頼るわけにはゆきません。そこで自力難行道へと陥ってゆくのです。

現在の人間が神の子であり、既に完全であるならば、一つも過ちがないのですから、反省も努力も必要ありません。しかし、現在の人間は神の子になる途中の未完成な段階にあるのですから、五井先生がいつも説く通り、絶えず反省し努力する必要が出てくるのです。既に自分は完全な神の子であると自惚れて自己の言動を反省せず、向上する努力を怠れば、却って神の子にはなれません。人間は内に神の子を蔵しているのですが、「自分は神の子である」と宣言しても偽善者になるだけで、自力でその神性を顕現することができないのです。不完全な心境の持ち主が「私は神の子である」と宣言すれば、それは神に対する不遜となってしまう、却って神の子への進化を阻害することになります。

そこで、人間は守護の神霊に助けてもらう他ないと、五井先生も私も声を合わせて説いているのです。「心の法則による開運法」は自他を責め裁く欠陥があり、「我は神なり、我は完全円満なり」の真理宣言行は、正直な人は心苦しくなり、正直でない人は偽善者となるという非常なる欠陥があるのです。その欠陥に五井先生は気づいたのでした。「もっと正直に、当たり前生きられて、しかも理想へと無理なく登ってゆける道はないだろうか？」と五井先生は考えられました。その思索の結果、守護の神霊に神性開発を助けていただく他力行を発見したのです。他力行即神我一体、他力行が神我一体への最短の道であることを五井先生は知ったのです。その他力行の具体的な方法が「世界平和の祈り」の道であるのです。

五井先生の教えを理解した私たちは、「心の法則による開運法」はしませんから、自他の心を責め裁くようにはなりません。「真理宣言行」もしませんから、無理に背伸びして偽善者になることなく、正直に明るく生きることができます。私たちは「世界平和の祈り」しかやらないからです。私たちには「世界平和の祈り」しかなく、責め裁く教えがないのですから、誰をも責め裁く必要がないのです。偽善の教えがないのですから、偽善者になることなく、正直に明るく、しかも理想に向かって希望を持って生きることができるのです。私たちは「心の法則」によって責められることはありません。無理に「私は健康である」と真理を宣言するように強制されることもありません。正直にありのままに打ち明けても誰もその人を責めることはありませんし、無理に真理を宣言するように叱咤されることもありません。「世界平和の祈り」以外の余計な教えが無いからです。

「世界平和の祈り」を唯一の行法としている私たちは、このように大光明の生活を送っているのです。「世界平和の祈り」こそ光明思想の行法であり、一つも欠陥のない完全な神性開発法であるのです。

「心の法則による開運法」と「真理宣言法による神性開発法」、この二つの何れの方法にも、神性開発を妨げる致命的な欠陥が潜んでいるのです。この事実にも一日も早く気づいて、「世界平和の祈り」に全託する人が一人でも多く増えることを五井先生はじめ私たちは祈り続けているのであります。

中庸の真理の宣言は正しい

誤解のないように説明しておきますが、「人間は本来、神の分霊である」という教義は正しいのですから、何万回唱えてもよいのです。しかし、「人間は今、神の分霊である」と「人間は本来、神の分霊である」とは違う意味であると私は区別させているのです。「人間は今、神の分霊である」というのは、真理を現実を持ってきて、迫力はあるのですが、現実には人間は神性を顕現していないのですから、これでは嘘になると言うのです。理想は今直ぐに現実化してほしいのですけれど、現実にはまだそうなってはいないので、嘘になり偽善になり、現実には合わない真理の言葉であると言えるのです。また、「我即神也」という言葉は、「即」という文字がありますから、「私は今、神である」という意味でありまして、「私は本来、神である」という意味ではないのです。昌美先生も「私は今、神である」という意味で説いているのです。「本来、我即神也」ならば正しいのですが、「我即神也」だけだったら、それは「直ちに今」という意味ですから、現実には合わない真理の宣言となるというわけです。

「人間は本来、神の分霊である」という教義は、どんなに宣言してもよいし、唱えれば唱えるほど神性が自然に開発されてきます。ですから、これを唱えるのが好きな人は唱えたらよいのです。しかし、これだけでは神の本質を理解できない人は依然として多いし、この言葉では人類の合言葉にはなりえません。そこで、「世界人類が平和でありますように」という祈り言が必然的に生まれたのです。

なお、真理の宣言としては、「人間は本来、神の分霊である」の他に、「人間は未来、神の分霊である」というような表現で宣言しても正しいのです。「人間は未来、神の分霊である」という言葉は「人間は未来に神の分霊になる」と言い換えることができます。「世界平和の祈り」を祈り続けてゆけば、人間は誰しも神の分霊の本体を現すことができるようになるのです。未来において人間は誰しも神人となるのです。それを広くして人類規模で言えば「未来において世界は平和に成る」と言えるのです。

五井先生の「消えてゆく姿で世界平和の祈り」の前段は、業想念を否定する表現となっておりますが、私は本心を肯定する表現として、「世界は平和になるという信念で『世界平和の祈り』」と説いています。この二つは、表現は異なっても同じ意味です。催眠術のように暗示的に言うのではなく、真理と信じて、「あなたは幸福になる」「世界は平和になる」と宣言するのです。「将来、私は幸福になれる」と信じるから強い力が湧いてくるのです。「今は戦争があるけれど、未来はきっと世界は平和になる」と信じるから、「世界を平和にしよう、『世界平和の祈り』を広めよう」という勇気が湧いてくるのです。「私は幸福になれないかも知れない」「人類は滅亡するかも知れない」と未来の理想を疑ってしまったら氣力を失います。

「真理の宣言は誤り」と言っているわけではなく、「理想に片寄った現実無視の真理の宣言は誤り」と私は説いているのです。「理想と現実をつないだ中庸の真理の宣言は正し

い」のです。「我即神也」のような理想に片寄った現実無視の言葉では、理想と現実がつながりません。ですから、これは誤りであると言うのです。「世界は現在平和である」という言葉もそうです。理想ではありますけれど、現実にはそうならないのですから、理想と現実がつながりません。だから、無理な真理の宣言となるのです。しかし、時間の経過を加えて「世界は未来に平和になる」と言えば、今度は現実にも矛盾しないし、理想にも矛盾しない真理の宣言となります。現実には無理がありません。これを中庸光明思想と言うのです。

「業想念は無い」と言い切ってしまうと、真理を宣言する爽快感は一瞬感じられますが、現実には業想念は存在するのですから、否定しても否定しても業想念を目の前に突きつけられて、業想念の圧倒的な力に負けて、「業想念は無い」と押し通すことができなくなってくるのです。そこで苦し紛れに想念の法則（カルマの法則）を持ち出してきて、「業想念は無いのだけれど、あなた自身が『業想念は在る』と認めているから、業想念は存在するのだ。『無い』と思えば無いのだ。あなたが思ったから、現象としてこの不幸は現れたのだ。悪い想念を出したあなたが悪いのだ」と人を責め裁くようになってゆくのです。

ところが、その真理の言葉を一段下げて、「業想念は現在は存在しているが、時間が経てば消えてゆく」と業想念を漸次否定する表現をしますと、迫力は少し劣りますが、現実の業想念の存在という事実には矛盾しませんから、『業想念は無い』と先生はおっしゃるのに、なぜ現実には業想念（不幸や病気や災難）は在るのですか？」と質問されることがなくなります。それは、「業想念は現実には在る」と現実の業想念の存在を正直に認めているからです。それでいて「今の業想念は時間がたてば消えてゆく」と漸次否定しているのですから、「未来において業想念は無い」という理想にも矛盾していないわけです。

未来には業想念は無いのですから、自分や人を責め裁く必要もありません。悪が存在していると思うから、自分や人をいつまでも責め裁くわけです。悪は無くなってしまいますから、赦すも赦さないもありません。想念の法則を用いて、「善いことだけを考えよう。悪いことを考えまい」と、ビクビクと臆病に暮らす必要はないのです。「未来に悪は無い」のですから、想念の法則を用いて自分や他人の想念を分析したりしないでもよいのです。想念の法則など必要ないのです。これこそ光明思想であるのです。

そこで、「業想念は消えてゆく姿」という理想と現実の中庸に位する言葉が最善の教えであると言うのです。五井先生の「消えてゆく姿」という教えは、頭の悪い、霊性の低い信徒達を導くための方便的な言葉ではありません。『消えてゆく姿』という教えは中途半端な教えであり、昔の古いやり方であり、『悪は無い』という教えこそが現代の新しい教えである」と説いている宗教者がいますが、そんなことを説いている宗教者は、五井先生のみ心を知らぬ大馬鹿者であるのです。「消えてゆく姿」という言葉に大きな意味があり、過去の古い宗教のように自他を責め裁く必要がなくなり、人類は赦されたのです。神の慈愛の教えであり、大きな赦しの言葉である「消えてゆく姿」という教えを低く見てはいけません。

悪も病気も不幸も災難も、不完全なものは全て消えてゆきます。そして、世界は平和になるのです。今どんなに苦しく辛いことがあっても、それは一時的なもので、いつかは必ず消えてゆきます。自分にどんな欠点や欠陥があっても、全てそれらは消えてゆき、何れも完全な神性を現すことができるのです。他人の悪も時間と共に消えてゆき、全ての人々が完全円満性を現すようになります。人と人との不和も国と国との戦争も必ず消えてゆきます。そして、私たちの地球は平和な理想世界となるのです。

不完全な姿が一日も早く消え去るように、私たちは守護の神霊に祈り、宇宙天使の方々に応援を願っているのです。「世界人類が平和でありますように」と祈ることが守護の神霊の力を発揮させることになり、地球の業想念を消滅するのに最も効果的であるのです。

「業想念は必ず消えてゆき、世界は平和になる」と信じて「世界平和の祈り」を祈ってまいりましょう。世界は必ず平和になります！

質疑応答 1：人生において最良の選択をするために

【ご質問-1】

「直感で感じることは守護の神霊の導きである」と考えてよいのでしょうか。「それに引き換え、後から出てくる想いは業生の思いである」と考えてよいのでしょうか。実は最近見合いの話があつて、写真と紹介書を見た時点では導きを感じなくて（かといって、そのことで時間をかけて祈ったわけではありません）、「今回は見送りたい」との旨を間に人に伝えたのですが、やはりそれでも会ってほしいとの依頼があり、会ったのですが、やはりお断わりしました。しかし、時間が経つに従って、あの時の判断は正しかったのかな？と思ったりしています。この思いはやはり業生の思いでしょうか。見合いに限らず、幾つかの選択肢がある時、選択に迷いが出た時、直感でよいと感じたものを選択するのが結果的によいのでしょうか。

【お答-1】

直観と直感とは普通は同じ意味として解釈しておりますが、肉体頭脳の思考によらずに霊的に物事の正しい本質を知ることが直観と言い、直感という言葉は理論という言葉に対する反対語として使います。

宗教の道を歩んで行くにも、知性的論理的に頭と心で納得してから信じてゆく理論的なタイプの人と、理屈や論理で考えるのが苦手で、第六感を含む感覚で判断してゆく直感的なタイプの人がいるのです。どちらがよいということはありません。理論的な人は、論理的に納得するまで実行に移さないという短所がありますが、いったん論理的に納得すると、巖のようにどっしりと落ち着いて信仰心が揺るがない、という長所があります。また直感的な人は、神仏のみ心の中に素早く入ってゆける長所があるのですが、理論的には何も分

からないので、他の宗教のお陰話を聞いたり他の宗教書を読んだりすると、直ぐに影響を受けて、フラフラッと他の行法をやって本道を外れて行ってしまう短所があるのです。そこで私は、理論的な人にも直感的な人にも、どちらの人にも満足していただけるように教えているのです。真実に直感的な人には何も詳しい教義を説明せずとも、「世界平和の祈りを祈りましょう」と私が一言いえば、「それは素晴らしいですね」と答えて下さるものです。しかし、そうした直感的な人ばかりではありませんから、理論的にも納得できるように教える必要があるのです。理論的に正しい宗教を学び、心で納得した上で、直感的に守護の神霊のみ心の中にパッと飛び込んでゆくという生き方が、誰にでもできる安全な宗教の道であろうと思います。

ご承知のように、第一直観は神のみ心です。その次の瞬間に出てくる選択肢は業生の想念から出てきた答えです。と申しましても、心を鎮めていないと、どれが第一直観なのか、第二想念なのか判然としないことが多いと思います。潜在意識にある業想念が第一直観を妨げてしまいまして、普通の人の場合、必ずしも最初に思い浮かんだ答えが第一直観とは限りません。自己に都合のよい、業生の甘い答えが出てくることもあるのです。第一直観はごく微かな微妙な靈感のひびきで受信できず、第二想念が力強く現れてきた場合、第二想念をあたかも第一直観と勘違いしてしまうことも少なくありません。第一直観的に素早く行動しているつもりでいて実は業想念の欲望の赴くままに動いていたり、逆に忍耐して熟慮しているうちに行動するチャンスを逸したりと、第一直観のままに行動することが大事と分かっているにもかかわらず、業想念を浄めないうちは正しい判断をすることが案外難しいものです。

思えば人生とは選択の連続で、どこの学校へ行くか、誰と付き合うか、どこの会社へ勤めるか、誰と結婚したらよいのか、どこに住んだらよいのか、誰にこの仕事を頼んだらよいのか、自分に適した宗教は何か等々、いつ・どこで・何を・どのようにするかと選択することによって、その人の人生が大きく変化してまいります。幸福になるのも不幸になるのも人生の選択次第とも言えます。学校の成績がトップで幸福そうに見えた人が、暫く経って会ってみると、まるで別人のようにやつれ果てていたり、そうかと思うと、学校の成績が悪くてビリだった人が会社の社長になって幸福に暮らしているということがあって驚かされますが、こうした結果も、よりよい選択をしたか誤った選択をしたかによって人生が変わってしまった例です。それでは最良の選択をするにはどうしたらよいのでしょうか。

お見合い話の場合、「守護霊様、私たちの天命が完うされますように」と祈ってから「今回のお見合い話は見送りたい」と判断した場合には、お祈りしないで判断した場合とは違うのですから、後で「私の判断は正しかったのだろうか？」と思い悩んではいけません。仕事上では、自分のミスに気づいたら速やかに上司に報告し、自分の行為を改めるべきですが、お見合い話のような場合には、たとえ過去に自分の判断が誤っていたとしても、一度決断して相手に伝えた答えを後日覆すべきではありません。それでは却って相手に迷惑をかけるからです。「やはり、あの人と結婚した方がよかったかな」と迷う行為が、「あの人は優柔不断の人だ」と思われて人から信用を失ってしまうのです。

「世界平和の祈り」とその他の行法を比較してみた場合、私の第一直観では「『世界平和の祈り』は最善の方法である」という正しい答えが出てくるのですが、業想念がありますと、「『世界平和の祈り』よりも、『世界は平和である』と断定的に宣言する方が効果的だ」というふうに誤った答えが出てくるのです。「世界平和の祈り」を祈っていれば、ただそれだけで、何れは守護の神霊の正しいみ心を第一直観として受け取ることができるようになるのですが、それだけで満足できない人は、「守護霊様、み心のままに、正しい選択（正しい判断）ができますように、私を導いて下さい」と祈るとよろしいでしょう。

「世界平和の祈り」を祈っておりますと、守護の神霊の加護力が強くなり、守護の神霊の智慧が授かりますから、よりよい選択ができるようになります。守護の神霊に常に感謝しておりますと、たとえ自己の判断が間違えても、守護の神霊が自己の運命を修正してくれるのですし、過去に決断したことはもう取り返しがつかないのですから、過去の行為は消えてゆく姿として、「世界平和の祈り」から再び再出発すればよいのです。人によっては、一度決めたことであるのに直ぐに不安になってしまい、途中でキャンセルしたり約束を破ったりする人がいますが、そのように不安定な気持ちでは人に信用されなくなります。たとえ最善の方策でなくてもよいから、一度約束したことは守らなくてはなりません。結論に至るまではいくら迷ってもよいのですが、一度選択し決断したらもう迷わぬようにすることです。たとえば高速道路の分岐点で、「右と左のどちらへ行こうか？」と車を止めて迷っているわけにはゆきません。一瞬の判断で決めなくてはなりません。仮に間違った方面へ進んでしまったとしても、途中で引き返すわけにはゆきません。暫くはそのまま進んで行き、目的地へ行ける新たな進路を見出せばよいのです。

守護霊様のご判断を信じて、「守護霊のみ心のままに為さしめ給え」と祈った後に決めた結論は守護霊様のみ心であり、守護霊様との約束であると思っ、選択した結論を変えぬことです。相談者のお見合い話のように、結論を下した後で「あの時の判断は正しかったのだろうか？」と迷うのは業生の想いでありまして、今さら未練がましく迷ってはいけません。

もし仮に自分にとってこの世で最もふさわしい配偶者と出会ったとしても、お互いに業想念を持っている間は完全な結婚生活などあり得ません。言い換えれば、自己の業想念が消えてゆけば、自己の本心が現れてきて、正しい直観が働くようになり、正しい決断が下せるようになるのです。業想念のあるうちは、その時は正しい判断をしたとしても、次は誤った判断をしてしまうかも知れません。また、失敗したように見えても、その経験が次の成功に生かせるかも知れません。ですから、自己の業想念を守護の神霊に浄めていただくことこそ第一に為すべきことであるのです。「世界平和の祈り」を祈り、守護の神霊に感謝して自己の業想念を浄めていただきながら、決断したことを実行し、過去の失敗も成功も消えてゆく姿として割り切り、「未来は必ず善くなるのだ」と明るい未来を信じてゆくようにすれば、次第に守護の神霊のみ心と自己の判断が一つになり、直観力が増してきて、正しい選択ができるようになってゆくのです。皆さんは、正しい直観力を増すために、

迷わずにまず「世界平和の祈り」を選択して下さい。「世界平和の祈り」を祈っていさえすれば、あなたの人生の大事な分岐点において最良の選択ができるようになり、次々と幸運に恵まれ、幸福な人生を歩めるようになるのです。

質疑応答 2 : 「凡夫易行実践五ヶ条」について

【ご質問-2】

《肉体の自分では何事もなし得ないのだ、と徹底的に知る》にはどのようにすればよいですか？ 具体的にご教示をお願いします。

【お答-2】

『如是我聞（正・続）』は、私も若い頃から何度も読ませていただきました。五井先生のみ教えを短く要領よくまとめてあるので分かりやすく、有り難い本です。その中に書いてある「凡夫実践五ヶ条」(『続・如是我聞』No.319) についてのご質問ですが、ここには、他力行の方法と他力行から自ずと生ずる信念が書かれております。

五井先生は「徹底的に知ること」「こう思うこと」と説いていますから、過去の私もそうであったように、殆どの人々はここで、「この信念の言葉を思い込まなくてはいけない」「この信念の言葉を自分に言い聞かせなくてはならない」と誤解してしまうのです。ところが真実は、「この信念の言葉を思い込もう」とする必要もなければ、「この信念の言葉を自分に言い聞かせよう」とする必要もないのです。

五井先生は《肉体の自分では何事もなし得ないのだ、と徹底的に知ること》と説いていますが、自力的に徹底的に知ろうとする必要はないのです。「神様のみ心のままに全てを為さしめ給え」と守護の神霊に全託し、その全託が深まってゆきますと、自然に「肉体の自分では何事も為し得ないのだ」と知ることができるようになります。つまり、神への全託の祈りから「肉体の自分では何事も為し得ないのだ」という信念が生まれてくるのです。「神様、全てをお願いします。世界人類が平和でありますように」と「世界平和の祈り」に全託し続けてゆくことによって自力否定の境地になってゆくのです。

【ご質問-3】

《何事も自分がやるのではなく、神様がやってくれるのだと思う》のは、どのようにすれば思えるようになりますか？

【お答え-3】

最初の質問は自力否定形表現、次の質問は他力肯定形表現であり、形式は異なっても全く同じ意味であるのです。五井先生は同じ意味のことを「自力否定形表現」と「他力肯定

形表現」の二つに説いたのであります。

《何事も自分がやるのではなく、神様がやってくれるのだ》という信念も、祈り言から自然に湧いてくる信念の言葉であるのです。それは、「神様、み心のままに全てを為さしめ給え。世界人類が平和でありますように」と常に祈っていれば、そうした信念が現れてくるのです。一日の初めを「世界平和の祈り」で始め、「世界平和の祈り」で終わるように神に全託していれば、守護の神霊が24時間ずっと自分の肉体を動かして下さるのです。神への全託心は他人への依頼心とよく似てはおりますが、内容はまるで違います。全託心波動は神のみ心の中で最強の絶対力波動に変換される原理を知れば、迷わずに神に全託できるようになると思います。

【ご質問-4】

《臍下丹田に息がおさまる》とはどのようなことなのですか？ 「息がおさまった」のはどのようにすれば分かりますか？

【お答え-4】

「臍下丹田に息がおさまる」というのは、静かに長く吸った息を直ぐに吐かないで、約十秒間ほど臍下丹田に気を充実させて息を止めておくことです。そして息を吐く時には、臍下丹田から静かに長く息を吐き始め、息を吐き切ったら、やはり臍下丹田に気を入れて少し息を止めます。気が頭の方に上がると呼吸が浅くなり、気が臍下丹田に落ち着くと呼吸が深まり、精神が安定するのです。臍下丹田に息がおさまった時には、体が微塵も動かない不動体になります。体が少しでもグラグラッと動いたら気が乱れているのです。統一中に自分の上半身がグラッと動くか動かないかで、臍下丹田に鎮魂していないか鎮魂しているかが分かります。しかし、「世界平和の祈り」を祈り、正座で統一していると、自然に臍下丹田に息がおさまるので、自力で呼吸法を意識する必要はありません。

【ご質問-5】

もう少し易しい、森島先生による「凡夫易行実践5ヶ条」がありますれば教えて下さい。

【お答え-5】

五井先生の五ヶ条は、凡夫易行用と言いながら、まだまだ難しいですね。もう少し易しい私の凡夫易行道とは「世界平和の祈り」の行法の一ヶ条だけです。

☆私の凡夫易行道：毎日一回でもよいから、「世界平和の祈り」を一生祈り続けること。

【参考：凡夫易行実践五ヶ条】

《 在る人から「凡夫易行実践五ヶ条を教えてください」といつてきた。五井先生は次のよ

うに五ヶ条をおあげになった。

- 一、肉体の自分では何事もなし得ないのだ、と徹底的に知ること。(これがほんとうにわか
かったら悟ったと同じだがね、と先生はおっしゃった)
- 二、なんて自分はだめなんだろう、と思ったら、すぐそれは過去世の因縁の消えてゆく姿
と思い、世界平和を祈ること。
- 三、たゆみなくつねに祈ること。
- 四、何事も自分がやるのではなく、神さまがやって下さるのだと思うこと。
- 五、朝起きたら祈り、夜ねる前、少し時間をかけて祈れ、そうすると自然に臍下丹田に息
がおさまる。》

(高橋英雄編著『続・如是我聞——五井先生の言葉——』No.319、白光真宏会出版局)